



『学園探訪』シリーズ

第2回

ヴェニスのコクリコ

民族資料博物館のアドバイザーを務めていただいている学園長より、構内の参考作品をめぐって交流を育まれてきた思い出をおうかがいするシリーズです。第二回の今回は「ヴェニスのコクリコ」についてお話をいただきます。



作品の前に立つ大西学園長

参考作品：(原画) ミシェル・アンリ
シルクスクリーン(184 / 250)
71.7 × 91cm
(中部大学蔵)

Michel-Henry (ミシェル・アンリ、1928～、フランス生)は、20世紀後半のフランスを代表する画家。美しく豊富な色彩と画面構成、大胆なマチエールが特徴で、花と建物をモチーフにする作品が多い。パリ近代美術館他世界の多くの美術館に作品が収蔵される。作品が明るく幸福感に満ちているところから「peintre de bonheur (幸福の画家)」(フランスの美術評論家による)と呼ばれる。

イタリアの「水の都」ヴェニス(英)(伊・ヴェネツィア)には、これまでに3度ほど訪れたことがあります。常に魅了される街です。

船上で、遠くに見えた教会のドームや美しい町並みがみるみる近づいていく様を眺めていると、海に浮かぶ都市を自分たちの手で創り上げたヴェニスの人々のバイタリティに改めて驚かされます。また、港に降り立ったときには、街の守護聖人である聖マルコのシンボル、翼を持つ獅子像をまつる美しい柱頭装飾にはるか上空から迎えられる気持ちがします。それは世界の海に目を向けてきた海の民たちの、豊かな知力と勇気を培いながら自分たちの街を愛してきた眼差しとプライドを感じるものでした。私もまた同じように、旅を終えて現実の自分の世界に戻り、その場所に対して愛着を持って眺める意識を大切にしたいと思返すのです。

ちなみにコクリコの花とは、「ひなげし(ポピー)」のことで、赤い花卉の花言葉は「慰め」「感謝」。またフランスでは赤いひなげしは国旗の赤(博愛、友愛)を示します。ヨーロッパでは戦没者の追悼式典に用いられる花としても知られています。一方中国では『司馬遷』で項羽の愛人の説話に由来する「虞美人草」の名で知られています。いずれにしても、その場所に生きた人々の姿を追憶する意味あいでも共通しているように思われます。

このミシェル・アンリの作品は、そんな私の旅の印象を懐かしく思い出させてくれるのです。また彼の作品をはじめとして20世紀の美術家たちが若いエネルギーをもって新たな価値観を提唱してきた思いがかたちとなって生命力がほとばしるような作品を眺めていると、作品のある場所全体も明るくなるように思えてきます。大学という場所作りを考えたとき、恩師や友人と夢や希望を自由に語らう日々の思い出をかたちにする場、そしてより多くの地域の人々が集い憩う場となるよう、ささやかな灯りを灯したい気持ちで、学内に新たな校舎が建つたびにその一隅に版画やポスターを設置するよう試みてきました。

私たちのキャンパスにおいても、いくつもの美しい記憶が紡いでいける場所になるようにと願っています。

索引

<p>◇巻頭 『学園探訪』シリーズ 第2回『ヴェニスのコクリコ』</p> <p>2013 秋季・冬季行事報告</p> <p>◇特別講座2 10月 『古典絵画講座』秋学期編がスタート 民族資料博物館 原田千夏子</p> <p>◇2013 秋季企画展示 10月 『素材研究展示 — 古典と現代の比較 — 顔料と染料における日本画の新たな表現』 民族資料博物館 原田千夏子</p> <p>◇2013 特別講演 『伝統文化を支える今日の材料「素材研究」』</p> <p>10月 第一回「箔の今日～伝統工芸と食文化」講演と実演(金箔) 民族資料博物館 原田千夏子</p> <p>11月 第二回「現代日本画の胡粉と顔料について～貝殻から生み出す白色の美」 民族資料博物館 原田千夏子</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p>	<p>◇2013 秋季連続講演 フィードワークの現場から「地域文化と民族資料」</p> <p>12月 第一回「韓国農村の民族文化 1970年代の映像で顧みる」 民族資料博物館副館長 宇治谷 恵</p> <p>12月 第二回「パプアニューギニアの伝統と現在」 民族資料博物館副館長 宇治谷 恵</p> <p>◇協力行事 文部科学省 平成25年度「地(知)の拠点整備事業」選定取組 春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業 2月 『博物館へ行こう! 春日井市立北城小学校の子どもたちが選んだ世界各地の民族資料スケッチ展』 博物館運営委員・国際関係学部国際文化学 准教授 中野智章</p> <p>◇特別講座(古典絵画) 三周年記念展 3月 『平成25年度 特別講座受講生発表展示』 日本美術院特待・民族資料博物館外部専門委員 下川辰彦</p> <p>◇トピック 常設展示～パプアニューギニア資料コーナー紹介 2014 上半期(春季夏季)行事案内</p>	<p>5</p> <p>6</p> <p>7</p> <p>8</p>
---	-------------------------------------	---	-------------------------------------

10月

■ 特別講座2

「古典絵画講座」秋学期編がスタート

【期間】 2013年10月2日～2014年2月12日 水曜日・午後／全12回
 【教室】 10号館6階 106Jゼミ室

指導講師：下川 辰彦（日本美術院特待・民族資料博物館外部専門委員）



制作風景

春学期にひきつづき、古典絵画を学ぶ実技講座の秋学期編が始まった。

できるだけゆきとどいた指導を前提にしたいという点で定員制とし、今回も人数を大幅に増やさないこととなった。

受講生のなかには、春学期から継続して制作に取り組む人も

いる。各自の経験年数等に応じて、それぞれの制作進行があることから、指導講師は一人ひとりの状況を見極めて必要な提言を行う。その様子は、下地作りや構成の段階から線描や彩色まで、さまざまに応用した方法を実際に画面上で示すもので、受講生らはメモによる記録と、知

覚の五感すべてによる記憶をフル活動させる充実した時間を過ごしている。

今期は年間通して複数枚の作品制作を行う受講生もおり、年度末から年度始めに予定している展示発表も期待したい。

（原田）

10月

■ 2013秋季企画展示

素材研究展示 — 古典と現代の比較 —
 顔料と染料における日本画の新たな表現

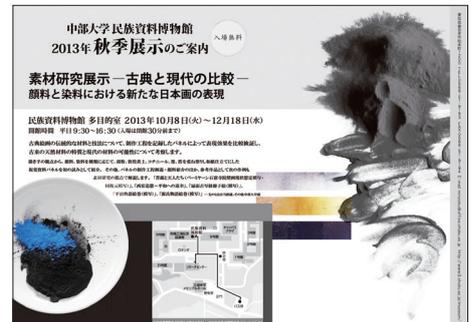
【期間】 2013年10月8日（火）～12月18日（水）
 【会場】 民族資料博物館 多目的室および、1F エントランス

◇パネル制作・解説考証

下川 辰彦（日本美術院特待・民族資料博物館外部専門委員）

◇企画担当・記録解説

原田 千夏子（民族資料博物館 事務員・学芸員兼務）



秋季企画展示チラシ

「素材研究」を館の活動テーマの一つにとりあげている当館では、天然素材の材料を用いた顔料や染料の特徴や性質について調査研究している。

今回の展示では、日本画の顔料と染料に着目し、実際の和紙を貼った画面に色調の特徴を示すパネルを色別に新規に作成したものを複数展示紹介した。

本展示は、「素材」を通じて実物に近づく体験と考察を鑑賞の出発点として考えていきたいとする館の教育研究活動の一端として試みた。

展示パネル制作にあたっては、法隆寺金堂模写事業に参加した経歴をもつ日本画家である

下川辰彦氏の協力を得て実現した。

パネル制作の目的は、天然材料による色調の特徴を示すために、実際の絵画作品に用いられる重ね塗りの状態でわかりやすく示す点である。さらに、比較として現代の加工材によって作られた顔料の場合も制作し、色別に両者を並べ合わせて展示することで、天然材の持つ秀でた効果を視覚的に提示した。

映像や複製の技術が発達した現代生活において、私たち一般は、天然材の持つ秀でた色調を実際の生の実物で鑑賞する機会が極めて少ないといっている。

かつて、国風文化が隆盛した

平安時代後期には、現代で国宝、重要文化財と指定されている数多くの優れた作品が生まれ出されたが、その多くは美術博物館の暗い照明の下で特別展示の際にのみガラスケース越しにかいまみるだけである。

周知のとおり、天然の顔料等を用いる絵画技法は、大陸より日本に伝来してきたと考えられているが、その製造技術と表現技術の両面を発展させ、繊細かつ豊富な色調を生み出し、独自の美的感性の表現として日本人が高度な領域にまで発達させてきた歴史がある。



日本が古来から継承してきた伝統的な絵画手法においては、岩石や鉱物、貝殻、植物繊維、松脂、動物の毛・皮脂など、日本の風土に適した自然環境において育まれた自然の恵みを実によく活かし、そして非常に優れた表現効果を生み出している。しかし、実際のところ、多くの一般の私たちは、美術史の知識

として作品に対して言葉ではその名称を知っているが、その素晴らしさがどのような点にあるのか、次代の子どもたちに説明することがどれだけできるだろうか。

本展示のために作成したパネルは、今後は、館の催事である「特別講座（古典絵画講座）」のほか、鑑賞教育活動のための教

材として活用していく予定である。

制作準備の過程では、平成24年度 全国博物館学講座協会 西日本部会の研究助成をうけ、調査研究活動の成果の一部として報告したことを付記する。

(原田)

10月

■ 2013 特別講演

伝統文化を支える今日の材料「素材研究」

11月

第一回「箔の今日～伝統工芸と食文化」 講演と実演（金箔）

講師：大平明子氏
 実演指導講師：富澤誠治氏（株式会社タジマ 主任）
 実演指導補助：塩安正昭氏（株式会社タジマ）

第二回「現代日本画の胡粉と顔料について ～貝殻から生み出す白色の美」講演

講師：中川晴雄氏（ナカガフ胡粉絵具株式会社 代表取締役）



この特別講演は、当館の春秋二季の連続講演とはテーマを別にして、秋季企画展示との関連テーマとして名のとおり特別に、二回連続の講演として企画した。

二回の講演は、いずれも日本の伝統芸術に欠くことのできない素材である、金箔と胡粉をとりあげ、両者の製造に関して長い歴史を誇る老舗企業の協力を得ることがかない実現した。

通常の春秋の連続講演との違いは、講演のなかで映像のほかに、材料の「実物」を用いて説明・解説をいただく時間を設けた点である。

参加した聴衆へは、実際に「素材」に触れる機

会も導入することで、より身近に伝統文化を支える材料の特徴を実感することができ、参加者からは多くの好評の声を受けることができた。

これは実際に製造に携わる企業のなかでも、とりわけ古来からの製造技術を守り育てるとともに、現代における発展した活用方法を積極的に調査研究されている努力によることがよく理解できた。技術の保持と発展という意味においても、「無形文化財」として通じる貴重な伝統文化の一つであると、一般のわたしたちも誇るべき「ものづくり」の遺産として再認識すべきであることがわかった。

(原田)

講師：大平明子氏 司会：下川辰彦（日本美術院特待・民族資料博物館外部専門委員）

実演指導講師：冨澤誠治氏（株式会社タジマ 主任） 実演指導補助：塩安正昭氏（株式会社タジマ）

第一回「箔の今日～伝統工芸と食文化」講演と実演（金箔）



講演の様子

第一回目は「箔」について、大平氏による箔の歴史と材料の性質による分類について解説いただいたあと、金沢市の老舗企業「タジマ」の指導で、材料キットを用いて純金の金箔を使って実際にデザインし、塗りの皿上に貼るという実演を行った。

手のひらほどの小さな皿ではあるが、その小空

間にどのように装飾シールと箔を配置するか、という構想と、実際に吐息で飛んでしまう箔の驚くほどの軽量さと、はかなさを指先で実感し、それらを駆使し意図的に造形的に制作することの難しさ、そして箔を扱う職人技の素晴らしさをわずかでも実感できる入口となる機会となった。

また、司会を務めていただいた下川氏からは、日本における平安時代後期に隆盛した国風文化（別名では、浄土教美術）において、日本独自で発達した絵巻物や扇面図に金箔を用いて施された装飾表現の原点には、当時普及していった仏教の日本的解釈の特徴のあらわれであり、表現の源泉となる内的な精神面には「鎮魂の祈り」が根底にあるとお話いただいたことは、形とその意味との関係性を総合的に考察する重要性と、人々が共有する文化という遺産の意義があらためて教示されたのである。（原田）

■ 特別講演 2 | 11月8日(金) 15:00 ~ | 中部大学リサーチセンター 大会議室

講師：中川晴雄氏（ナカガワ胡粉絵具株式会社 代表取締役）

司会：下川辰彦（日本美術院特待・民族資料博物館外部専門委員）

第二回「現代日本画の胡粉と顔料について～貝殻から生み出す白色の美」

第二回目は、白色を表現する「胡粉」について、京都府宇治市の老舗企業「ナカガワ胡粉絵具株式会社」の中川氏により、原材料である貝殻（イタボガキ）を用いた製造の歴史や、顔料について海外の古文獻からみる歴史や、日本のほか海外における材料の産地における特徴等について、映像のほか、胡粉や顔料の原材料となる貝殻や岩石、鉱物の実物を用いて解説いただいた。

胡粉は、日本画のみでなく、人形や能面、建築など多くの伝統文化の彩色装飾に欠くことができない。

中川氏は、宇治の平等院の建築装飾の保存事業においても携わっており、古来からの製造方法でなければ表現できない色合いが復元に重要である点も紹介された。

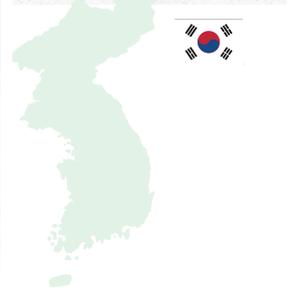
また「素材」に焦点をあて、その観点から大陸伝来の技術を考察し、中国やヨーロッパにおける文献や産地の様子を比較することで、日本との交易や文化との関係性を再確認する講演の内容であった。この点は、シルクロード文化の交流史を通じた解説方法を考察したい当館にとっても、非常に参考になるものとなった。

講演の途中で、鉱物の原石を数種を回覧していただき、参加者は貴重な原石に直に触れることができた。聴衆のなかには、長年絵画を学ぶ一般の人々も複数おり、日本画における「群青」（ラピスラズリ・かつてルネサンス期は金とならび高価に交易に用いられた）の原石の重みを実感できたことに感銘を受けていた人もいた。

講演では、中川氏は職人の育成と製造環境の把握と維持について、世代を越えて取り組まれてきた実状にも触れられており、伝統文化を支えるとは、表現者や聴衆だけではなく、製造に携わる実に多くの人々の努力によるものでもあることをあらためて実感したのである。（原田）



講演の様子



■ 連続講演 1 | 12月2日(月) 15:00 ~ | 中部大学リサーチセンター 大会議室

講師：伊藤亜人氏（東京大学 名誉教授） 司会：宇治谷 恵（民族資料博物館 副館長）

「韓国農村の民族文化 1970年代の映像で顧みる」

講演に先立ち、本学名誉教授の畑中幸子先生から、伊藤先生との大学研究室時代からのご関係にもとづく先生の人柄紹介と韓国研究の意義や困難さについての紹介があった。

畑中先生からの紹介でもあったが、伊藤先生は、長年、韓国や朝鮮半島の人類学研究を継続し、さらに発展されており、その功績により2002年には、韓国政府から、日本人で初めて「大韓民国勲章」を受けられた。

その功績からも、伊藤先生は、日韓両国から高い評価を得ている韓国研究の第一人者である。

また、当博物館の展示場には、伊藤先生が収集された民族資料が展示されており、当博物館にとってもお世話になった研究者である。そのこともあり、民族資料収集とは何か、あるいは「現場」におけるフィールドワーク調査とは何かを教示していただくことを講演の狙いとした。

講演では、先生の調査や研究について、漢字文化、儒教思想、民族主義、そして「複雑社会」という全体構造の視点からみた韓国文化への着眼が紹介された。

具体的な事例として、韓国・珍島における農村社会や民族文化を1970年代からの映像を活用しながら生産から暮らし、そして葬送儀礼まで幅広い文化や社会の変遷や変容について紹介と解説があった。伊藤先生が自ら「現場」で収集された資料や情報は「複雑社会」である韓国文化を考えるうえで貴重な報告であると認識する同時に、フィールドワーク調査の重要性を改めて再確認したのであった。

先生の熱弁は時の経過を忘れるものであり、予定終了時間を越えても、多くの参加者は席をたたなかつたのである。（宇治谷）



講演の様子

講師：豊田由貴夫氏 (立教大学観光学部 教授) 司会：宇治谷 恵 (民族資料博物館 副館長)

「パプアニューギニアの伝統と現在」

豊田先生は、パプアニューギニアをはじめとする太平洋地域研究の人類学者であり、現場にもとづいたフィールドワーカーでもある。

特に、パプアニューギニア研究においては、畑中幸子先生の業績を継承し、さらに発展させられている。

講演内容は、パプアニューギニアに暮らす約



講演の様子

800にもなる民族(部族)の特徴を言語等の違いをとおして紹介された。

特にピジン語またはピジン英語と呼ばれる言語がどのような過程で派生し、変遷してきたか。その言語が現代の生活や都市案内の表示など、多様な内容に使われていることなど興味ある内容であった。次に、パプアニューギニア・セピック川・流域の村々の人々の暮らしや宗教について、サゴヤシ・ヤムイモなどの食文化、儀礼や聖霊などの信仰及び観光との関連などを紹介された。最後に国民国家としてパプアニューギニアの現代的課題についての指摘は、これからの日本がどのようにこの地域と関係を進めるかを考えるうえで貴重なお話であった。

講演終了後には、参加者からも熱意ある質問や意見があり、今後の研究を継承・発展させるうえでも有意義な講演会となった。(宇治谷)

2月

■ 協力行事

文部科学省 平成25年度「地(知)の拠点整備事業」選定取組 春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業

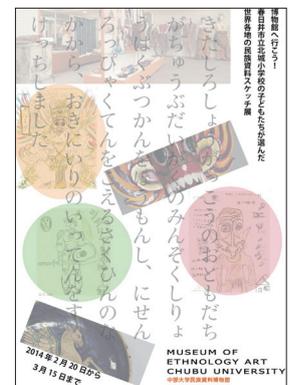
「博物館へ行こう！ 春日井市立北城小学校の子どもたちが 選んだ世界各地の民族資料スケッチ展」

(COC事業 国際関係学部)

■ 期間 | 2014年2月20日(木) ~ 3月15日(土)

■ 教室 | 民族資料博物館 常設展示内

展示指導：中野智章 (博物館運営委員・国際関係学部国際文化学科 准教授)



スケッチ展のチラシ



優秀作に選ばれた作品と水煙草

2013年12月に開催した、春日井市立北城小学校6年生児童を対象とする民族資料博物館でのワークショップ「学芸員のお仕事体験」をテーマに、生徒が作成した館所蔵民族資料のスケッチ画展示を行った。

この展示会は、国際関係学部が選定された文部科学省平成25年度「地(知)の拠点整備事業」取組「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業」の一環として実施

したものである。

児童がスケッチの対象に選んだ作品はさまざまだったが、その中からパプアニューギニアの祖霊像、エジプトの水煙草などを描いた作品が優秀作に選ばれた。

作品のオリジナルな色使いにとらわれず、自由に色をつけたり、またその用途についても独自の解釈を施したりと、発想の豊かさにも感銘を受けた。



スケッチをする北城小の生徒たち



展示風景

ワークショップの開催時には、こちらに促されるまで熱心にスケッチを続ける児童が多数おり、実物を見せる教育の効果のほどを実感できた。

あいにく、展覧会の開催時期がちょうど児童が小学校を卒業する頃にあたってしまったことや屋外へ出るには寒さが厳しい日が続いたこと、そしてワーク

ショップを受け、急遽本展覧会の企画を立ち上げたことで事前の周知活動がやや出遅れたことなどから、生徒の再訪状況はさほど芳しくなかったが、大学見学に訪れた多数の高校生ならびに各種講座や講演等受講者の方々には、館の活動の一端をご理解頂けたものと考えている。

なお、展覧会開催時には入口

階段部のガラス部分に生徒の描いたスケッチを用いた大判のポスターを外側に向けて掲示したほか、館内の民族衣装体験コーナー並びに民族楽器体験コーナーについてもリニューアルを行った。今後はこのように低年齢層に対する取り組みも拡げ、より地域に密着した博物館活動を展開すると共に、館が所蔵する作品を研究し、資料のさまざまな見かたやそこから広がる世界を紹介する試みが増えていくことを期待している。またその際には、地元公共団体並びにメディアとも積極的に協力し、全国的にも珍しい本博物館の情報発信をさらに進めていきたい。

(中野)

3月

■ 特別講座 (古典絵画) 三周年記念展

「平成25年度 特別講座受講生発表展示」

- ① | 会期 | 2014年3月20日(木)～4月10日(木)
| 会場 | 民族資料博物館 多目的室、1F エントランス
- ② | 会期 | 春日井市役所 市民サロン
| 会場 | 2014年4月16日(水)～4月20日(日)

指導講師：下川 辰彦 (日本美術院特待・民族資料博物館外部専門委員)

出品者：18名 (総点数 42点)

この「特別講座 (古典絵画)」は、当館が大学博物館として開館以来、初年度から開講している一般対象の絵画の実技制作講座である。伝統的な技術を要するものの一つ、絹、板を基底材にした絹絵、板絵の制作を主要なテーマにしつつ、今年度は、

絹絵・板絵・日本画 (紙本) を自由選択制にし、それぞれの基底材にともなう技術指導を、各自の進行に応じて指導講師が適切に指導をすすめていく内容とした。このため、同じ教室で制作しているあいだ、受講生は、基底材の異なる作品制作を行う仲間の制作状況も身近に勉強することができ、相互に触発しあう学習環境によって各自の作品に向かう意識がより向上するものとなった。また、胡粉や箔の取扱いをはじめ、伝統的な古典絵画の技術は、一度経験しただけでは会得できるものではなく、地道な継続活動と、一方で感性を新鮮に維持するという難しさをともなう。

また今回の展示にあたっては、過去に制作した作品もあわせて一堂に展示することとし



特別講座発表展のチラシ

た。三年にわたって行ってきた講座の活動について、確実に進展してきているその成果がこの展示空間において一目で認識できると自負している。展示初日に行われた指導講師による作品講評から、なかには初めて絹絵を描く初心者もいたということだが、このように全員にわたって作品の仕上がりを一定のレベルにもっていく講師の指導力をあらためて実感した。なお講座開講三周年を記念して、初めて春日井市役所市民サロンにおける発表も試みたことで、より多くの地域の皆様に見ていただく機会が増え、出品者とともに取り組むなかで励みとなった。今後の活動に対しても意欲的に計画していきたい。

(原田)



常設展示

『パプアニューギニア 資料コーナー』紹介



当館の常設展示の空間は、大きくわけて二つのスペースで構成しています。まず入口正面に立った右方に、新設のシルクロード室があり、一方の左方には、旧蔵の資料をメインとした地域研究エリアの一つ、オセアニア地域の民族資料を紹介する場所としています。その奥にさらにすすむと、その他の地域研究エリアとして、アジア、アフリカ、アメリカ、ヨーロッパへと続きます。主に民族楽器や衣装、生活道具等を一部展示台に陳列し、見学者が手に触れながら鑑賞できる方法をとっています。

3年前のリニューアル以前から前身の民俗資料室の要として位置づけられていたのは、オセアニア地域の資料です。これらは、主に畑中幸子教授(現名誉教授)によって収集、また購入されてきたものです。特に、壁面一面に並べた写真パネル群は、およそ1960年代から70年代にかけて畑中教授が現地(パプアニューギニア)に調査に入り、自らカメラを手に、近代化前のパプアニューギニアの当時の人々の生活風景を記録撮影した

「ファースト・コンタクト」の記念すべき一場面で、非常に貴重な記録資料です。

畑中教授は、戦後の高度成長期の日本を離れ、当時未開であった現地へ幾度も訪れ、長いときには現地に約3年間もの期間にわたって留まり、海外の研究者らともときに協力しながら現地の人々との交流のなかで調査を続けられたそうです。異なる文化を背景とする人間同志がじっくりと時間をかけて信頼関係を構築していくというフィールドワークの重要な根幹と、そしてそのための努力と労苦があったであろうことを、記録写真のなかの現地の人々のおだやかな表情から感じとることができるといえるでしょう。

畑中教授の当時の研究風景をより詳しく知りたい方は、次の新著をぜひお手にとってみてはいかがでしょうか。

畑中幸子著

『ニューギニアから石斧が消えていく日 人類学者の回想録』明石書店、2013年

◇春季企画展示

博物館は知の宝庫 選りすぐられた資料展

「私のこの一点」

◇春季連続講演(連続2回)

人類、環境、文明…オセアニア、ラテンアメリカ

第1回講演：平成26年7月16日(水) 「もう一つのクジラ論—オセアニアからの報告」

秋道智彌(総合地球環境学研究所名誉教授/生態人類学)

第2回講演：平成26年7月23日(水) 「古代アンデスの環境と人間」

大貫良夫(東京大学名誉教授/文化人類学)

◇夏季常設コレクション展示

「文様とかたち」

会期：7月8日(火)～8月10日(日) 会場：民族資料博物館 多目的室